

## AUTM レポートについて

このレポートは、知的財産マネジメント研究会のライセンス・アソシエイト分科会において2013年4月13日に発表されたAUTMレポートの報告書です。

AUTM (=Association of University Technology Managers) は、米国の大学技術移転関係者によって設立された Association で、現在は米国に限らず広く世界中の大学技術移転関係者が参加する組織です。毎年春に、米国でアニュアル・ミーティングが開催されており、今回は2013年2月27日から3月2日にかけてサンアントニオにて開催されたものの報告です。

AUTM Annual Meeting では、複数のセッションが同時並行で開催され、参加者は自由に自身が参加するセッションを選択できるため、どのセッションに参加したかで、その感想や評価も異なりますし、今回のレポートはあくまでも参加された方々の個人的な感想をご報告いただきましたので、この報告書が全てのAUTM Annual Meeting の評価ということではありません。

このような、報告の場を設けたのには、以下の3つの理由があります。

1. AUTM Annual Meeting に参加されたことがない方々へどのような会であるかというご紹介を行うため
2. 以前AUTM Annual Meeting には参加されたことがあるものの、今回残念ながらご参加いただけなかった方々への報告をおこなうため
3. 毎年、100名を越える日本人が参加するAUTM Annual Meeting において、次年度以降の企画提案を行うための意見をいただくため

大阪大学の加藤浩介さんが、AUTM の Assistant Vice President に就任されたこともあり、加藤さんを通じて、より日本の要望をAUTM に反映させていくためにも、このような活動は継続していきたいと考えております。

皆様のご理解をいただけますと幸いです。

ライセンス・アソシエイト分科会 担当 山本 貴史

# ユニバーシティーリサーチアドミニストレーターの立場から見た アメリカの技術移転\*

○土井達也

## 1 AUTM2013 参加目的

今回の AUTM 参加は、技術マーケティングと技術評価について学ぶことを目的とした。

ユニバーシティーリサーチアドミニストレーター(URA)の産学官連携業務として重要な点は、研究成果を社会実装可能な形で社会に送り出すことであり、そのために研究成果が創出される以前に、技術マーケティングにより社会ニーズを把握し、生み出されうる技術の価値を評価することで、研究の方向性を定める必要がある。研究の範囲には、個々の研究者から大学全体までが含まれる。

しかしながら、自身のマーケティング及び技術評価の能力不足から、技術及び市場を広い視点からとらえ、研究開発の方向性を提案することは実現していない。

そのため、AUTM 年次総会では、アメリカの技術移転業務を学び、その中でマーケティングや技術評価がどのように組み込まれているかを知ること、日本の URA 業務におけるこれらの知識の重要性や、業務への適応法について評価することを目的とした。

## 2 AUTM2013 における活動内容

参加セッションの数：7 件

- A4 Techniques and Strategies for Selling
- B3 Global impact in Technology Transfer
- SIG4 International
- ED5 Social Media Unplugged
- E1 Student Ambassadors
- F1 The Challenge of Faculty Consulting
- G4 Dose Your office Need a Marketing Guru?

ネットワークングイベント参加：5 回

- International Reception
- Opening Reception
- Closing Reception
- Lunch x2

ビジネスカード交換：11 名（日本人 8 名、

海外 3 名)

講演者に対する質問：1 回

## 3 AUTM 参加の効果

米国における TTO の立場の講演から、技術マーケティングを中心として、技術のハンドリングについて学んだ。また、技術評価は技術マーケティングを行うことで初めて可能になるもので、技術マーケティングの成果の一つであることが明らかとなった。ただし、米国の TTO と日本の URA という立場の違いがそのプロセスに影響を与えうるかは、個人としても組織としても未経験であり、実践により実証する必要がある。

## 4 今後の抱負

今回の AUTM 参加において学んだ技術マーケティングおよび技術評価を活用することで、我々 URA は、大学の研究活動の資金獲得・研究マネジメント・成果の社会還元を見据えて研究支援活動を行う立場から、社会ニーズおよび大学の強みを把握した大学全体の研究戦略の策定・実行を行えると感ずる。これを実際に行うにあたり、まずどの産業や企業に対してアクションをとるべきか、セグメンテーションを実施することを計画している。

## 5 AUTM 及び日本の産学連携実務者会議に求めるもの

現在の日本の URA は、大半が理系のバックグラウンドを持つ。一方 TT を見据えた URA 活動の必要性は自明であり、それにマーケティングやマネジメントなど MBA, MOT 的な知識が必要である。そのため、理系の URA が技術マーケティングやビジネスについて学べる機会の提供をお願いしたい。それには企業への出向、MBA, MOT 留学などのモデルシステムの構築、支援が含まれる。

\* What can be provided to Japanese university research administrator by American technology transfer activities?

# AUTM2013 Annual Meetingへの参加の機会を得て

○大屋知子

(独立行政法人国立循環器病研究センター 研究開発基盤センター 知的資産部)

## 1 AUTM2013 参加目的

独立行政法人国立循環器病研究センター(略称：国循)は、全国に6法人ある国立高度専門医療研究センターのひとつである。2010年4月に独立行政法人化した際に筆者が所属する知的資産部が設置され、主に医療系研究成果の権利化支援や知的財産の運用、および国循内の知的財産管理・運用体制の整備に取り組んでいる。

業務遂行においては、常に自己のスキル向上に努めなければならないと考えている。また、国循は国立大学等から数年遅れて独法化したこともあり、産学連携および実用化を推進する組織やしぐみをさらに構築していく必要がある。このためには、国内のみならず海外における産学連携実務者向けのミーティング等にも積極的に参加することにより国内外の産学連携の実情を把握し、それら現状を十分に踏まえた上で上記の活動を進めていかなければならない。

一方、筆者はこれまでに AUTM Annual Meeting に2回(2009年、2012年)参加している。そこで、当時の経験も活かしつつ今回 AUTM2013 に参加することにより、産学連携活動のさらなる促進を試みた。

本稿では、AUTM2013 参加における活動内容と得られた効果、さらに今後の抱負等について報告する。

## 2 AUTM2013 参加中に実施した活動

AUTM2013<sup>[1]</sup>参加中に実施した主な活動は、以下のとおりである。

・Keynote Address および Energy Roundtable の聴講

・分科会への参加：6セッション

A4<販売に対する手法と戦略>

B5<企業と大学との国際的連携モデル>

SIG-4<国際セッション>

ED6<企業—アカデミアのアライアンス>

F5<技術移転の基本について>

SIG-10<MTA に関するセッション>

・レセプション・食事時(オープニングレセプション、クロージングレセプション、朝食3回、昼食2回)およびコーヒープレイク時のネットワーキング：24名(日本人15名、海外9名)の方と名刺交換を行った。

## 3 AUTM2013 参加により得られた効果

### 3.1 参加した分科会の概要

より理解を深めるために、'All Audience'または'Fundamental'レベルの興味ある内容のものに参加したことで、今後業務を進めていく上での多くの有用な知見を得ることができた。

#### A4<販売に対する手法と戦略>

「マーケティング」と「販売」は異なるものであり、マーケティングと比較して販売手法のトレーニングの機会は少ないのが現状である、という説明がなされ、Selling の tips として、elevator pitch, value proposition, product knowledge, customer engagement が挙げられていた。さらにデータベースの活用やアライアンス先の決定方法、交渉をまとめる際の関係者との情報共有の重要性が議論され、最終的に win-win になるように進めるのが重要との話があった。

#### B5<企業と大学との国際的連携モデル>

企業と大学では文化や研究のアプローチの方法などが異なるため、企業側は大学と連携するための契約締結に向けてうまく交渉を進める必要があり、また大学側の"absolutely unchangeable terms"(例えば論文による公開、間接経費、特許に関すること)を理解しておかねばならないといった議論があった。また、東京農工大の具体的な事例紹介や、Sanofi のグローバルなネットワーク構築とプラットフォームへのアクセスについての報告があった。

#### SIG-4<国際セッション>

台湾、オーストラリア、ブラジル、日本か

らの産学連携実務者より、各国での産学連携の取り組み等の紹介とフロアとのディスカッションがなされた。

#### ED6<企業—アカデミアのアライアンス>

企業と研究者間の長期に渡る密な連携は必須であること、モデルとして Merck, Novartis, GSK とアカデミアとの連携事例についての報告があった。また、open innovation に至る経緯や日本における大手製薬企業と大学との連携事例の紹介があり、企業とアカデミアとの連携の Best Practice として win-win であることや金銭以上の価値を見出すことが挙げられていた。

#### F5<技術移転の基本について>

技術移転の基本的な事柄について、プレゼン資料はなしでフロア（実務上の具体的な課題を有している）とモデレータ・スピーカー（技術移転のベテラン）との Q&A 形式で進められた。

#### SIG-10<MTA に関するセッション><sup>[2]</sup>

NIH/AUTM より標準テンプレートとして UBMTA(Uniform Biological Material Transfer Agreement/生物統一 MTA)あるいは SLA(Simple Letter Agreement)のみを用いることとされている。しかし、それぞれの大学が UBMTA に似たテンプレートを使用している等の理由で UBMTA が使用されないという課題がある。そこで、AUTM MTA working group によって "UBMTA-like" MTAs としての MTA Toolkit や TAD(Transfer Agreement Dashboard)の整備が進められており、その詳細な紹介があった。

### 3.2 ネットワーキングで得たもの

レセプションや食事の際に米国をはじめとする海外の実務者と話をする機会が何度かあったが、いずれの方も各々の実務のプロであることを自覚し、目的意識をしっかりと持っているように感じられた。自分自身の業務への取り組み姿勢にも反映させていきたいと改めて痛感した。

一方、日本人関係者との交流については、通常の国内出張等では意外と持つことのできない、お互いの業務や課題についてじっくりと話しあう貴重な時間を共有することができたと感じている。さらに、今年は前年までと異なり、多くの同年代の URA（ユニバーシ

ティ・リサーチ・アドミニストレーター）の方々と親睦を深めることができた。今回得ることができた若手実務者とのネットワークは、効率的に活かしていきたいと考えている。

## 4 今後の抱負

来年以降も AUTM に参加可能ならば、まずオプションコースへの参加や海外の実務関係者との積極的なディスカッションを試みることで、英語力を含めた自己のスキルアップに努めたい。また、パートナーリングシステムの活用によるグローバルな産学連携推進の検討も進めたい。

さらに、今回の AUTM 参加により収集した情報や知見を活用して、所属機関における産学連携・実用化推進の組織およびしくみの構築等に貢献していきたい。

## 5 日本の産学連携実務者会議等に期待すること

AUTM の分科会においてはパネリスト—フロア間の議論が大変活発で、各人が有している業務上の課題を何とか解決していこうという意識を強く持っている印象を受けた。そこで、例えば大学技術移転協議会主催の UNITT アニュアル・カンファレンスにおいても AUTM と同様に同じ時間帯に開催する分科会の数を増やす（ひとつの分科会への参加者数を絞る）ことにより、AUTM のように議論がより密に進めやすいと思われる。

また、AUTM では Annual Meeting 以外でも頻繁に実務者向けのセミナー等が開催されているので、日本国内においても、実務者が参加しやすく且つ質の高い（例えば AUTM の講師を招聘しての）スキルアップセミナーのようなものが多く開催されることを希望する。

## 謝辞

本出張は、JST の研究成果展開事業（研究成果最適展開支援プログラム(A-STEP)）「フュージビリティスタディ(FS)ステージ シーズン顕在化タイプ」の補助を得た。

## 参考文献

- [1] AUTM 2013 Annual Meeting Program, AUTM, 2013.
- [2] 鈴木睦昭, 産学連携学会第 10 回大会講演予稿集, 97, 2012.

# AUTM参加を1つのステップアップポイントにするためには？

～AUTM2013に参加したCDの反省とこれから参加する人への提案～\*

○阿部紀里子（首都大学東京／元・浜松医科大学）

## 1 AUTM2013 参加目的

AUTM Asia 2013<sup>[1]</sup>には前職の浜松医科大学のコーディネーターとして参加した。医科系の単科大学である浜松医大では、数は多くないが学内の研究会集うから創出される医学・ライフサイエンス領域の知的財産について、外部の技術移転機関を通じて国内外の製薬企業及び医療機器メーカーとの連携を行っているが、ライセンス契約や共同研究につながる事例は少ないのが現状である。

ここ数年、米国の技術移転機関と中小・ベンチャー企業への技術移転の可能性について検討を行っており、昨年度には現地のベンチャー企業数社を訪問するなどの活動を行ってきた。今回のAUTMには、米国のライフサイエンス系ベンチャー企業への技術移転の現状に関する情報収集を目的として参加した。

## 2 AUTM2013における活動内容

### ○セッション参加

医学・ライフサイエンス領域に関するものを中心に5つのセッションに参加した。また、従前から海外技術移転について相談をしている支援機関と面談を行った。参加したセッションの講演者に対する質問や名刺交換を積極的には、後述の理由により行えなかった。

### ○ネットワーク活動

AUTMでは、朝食、昼食、コーヒブレイク、夕食等の参加者が自由に雑談的に意見交換できるいわゆるネットワーク活動を行う時間帯が多く用意されているが、つつい顔見知りの日本人と話し込むことが多かった。

## 3 AUTM 参加の反省点

### ○具体的な参加目的が未設定

前述したような目的はあるものの、この情報を持って帰らなければ！という目的意識と、具体的な目標を設定していなかったため、自ら積極的に情報を取りに行くのではなく、セッションや展示等を通じて、受

動的に情報を収集するに終わった。

### ○事前の準備不足

事前に参加予定のセッション及び講演者の所属機関や米国について下調べや勉強を行わずに参加したため、セッションの議論に入り込むことができず、講演者に対して質問もできなかった。また、AUTM Connectを利用して話を聞きたい米国大学の実務者を探し出してアポを入れることもできてなかった。

### ○語学力の不足

今回参加したセッションの2つはスライド等の資料がなく、口頭発表と会場からの質問から構成されるディスカッション形式であった。事前の準備不足に語学力不足が重なり、発言者の意図が理解できないことも多く、盛り上がる議論から取り残されてしまった形になってしまった。

### ○ネットワーク活動の不足

セッションや展示会場を含め、ランチやコーヒブレイクなど海外の実務者とコンタクトする場は多かったにも関わらず、名刺交換も十数人と少なく、今後の自分の仕事に有用なネットワークに繋がるものはなかった。

結論として、今回のAUTM参加を振り返ってみると、費用と時間をかけて渡米しなければ得ることができない情報やネットワークを得ることができたとは言えるのか？AUTMのホームページで会員に対して供されるe-learningでセッションの音声を聞けば良かったのでは？と自省の念に駆られている。

## 4 これから参加する人への提案

AUTM年次総会は、産学連携活動のキーパーソンによる基調講演、この1年間に素晴らしい活動を行った実務者の表彰、実務者の日々の悩みや技術移転の手法、技術分野に特有の問題、契約、法改正などテーマ毎のセッション、初心者向けの入門編セッション、研



修プログラムなど、産学連携活動に関するプログラムで埋め尽くされており、自身の課題を解決するヒントや具体的な手法、新しい価値観や考え方などがギュッと詰まっている。

また、知り合いになるだけで大学内での自身のプレゼンスやステータスがアップするような海外有名大学の実務者が数多く参加している。つまり、産学連携の実務者として、知識・スキルを学習し、国際的な人的ネットワークを拡大して大きくステップアップできる貴重な機会の1つと考えられる。

自身の反省を踏まえて、これから参加を予定している人に AUTM 参加で成長するための方法について提案したいと思う。

#### ○明確な目的意識をもつ

まずは、何のために AUTM に参加するのか自身の目的を明確にすること。そして、「先進的な取組みを行う△△大学の産学連携組織にネットワークを作る」「△△大学のアライアンス担当者に会う」など、具体的な行動レベルまで目的をブレイクダウンすべきである。

#### ○事前準備を怠らない

AUTM を有意義に過ごすためには、参加予定のセッションや発表者について事前の下調べを行い、自身の組織や日本における課題や疑問などをまとめておくべきである。

また、AUTM 参加者を検索できる「AUTM Connect」を活用して、興味のある大学や海外の実務者にダメもとで積極的にアポを入れるべきである。アポなしで自身の求める情報を持っている実務者と出会える確率は非常に少ない。

#### ○米国実務者を交えて食事をする

AUTM 会場での朝食、ランチ、レセプションでは偶然の出会いを楽しむために、日本人で固まらずに様々な国の実務者に声をかけるべきである。もし、英語が苦手であっても、自己紹介(自分の所属機関の情報や担当業務など)を予め準備していれば、名刺交換に困ることはない。また、英語が堪能な人と組んでネットワーク活動を行うことも一つの方法である。

#### ○帰国後に復習&ネットワーク強化を図る

AUTM セッションは、後日、ディスカッション音声のスライドとともに AUTM ホームページにアップされる。理解が十分でな

かったセッションについては復習するべきである。また、名刺交換した海外実務者に対しては、お礼や質問のメールを送信するなど継続的に連絡を取り合える関係に育てていくべきである。

## 5 AUTM および日本の産学連携実務者会議に求めるもの

日本からの AUTM 年次総会への参加者は毎年 50~100 人とされている。多くの渡米者が文科省等からの補助金により参加しているが、AUTM 参加が日本の産学連携活動の底上げにつながっているのか？産学連携・技術移転分野における日本のプレゼンスの向上や国境を越えた実務者ネットワーク構築につながっているのかは、微妙な部分があるように思われる。

AUTM は若手人材が産学連携実務者としてステップアップする絶好の機会であり、大学技術移転協議会(UNITT)としてもこれを支援すべきと考えられる。特に、初めての参加者にとっては、どんな準備すればいいのか？ネットワーク活動の方法など分からなかったり不安に思うことが多いと思われる。

そこで、UNITT において AUTM 初心者のための事前勉強会や、過去の参加者の声を集めた参加ガイドブックなどを作成したり、経験者による現地における新人サポートなどを行ってはどうかと考えている。

また、AUTM 参加の事前・事後に日本の参加者がディスカッション・報告する機会を設けることにより、所属組織を越えた密な実務者ネットワークの構築も期待できるのではないかと考えている。

#### 謝辞

AUTM2013 には、文部科学省より浜松医科大学が受けた「大学等産学官連携自立化促進プログラム・CD 支援型」の補助により参加させていただきました。AUTM2013 会期中に意見交換いただいた皆様、および、渡米中に業務サポートいただいた皆様に心から感謝いたします。

#### 参考文献

AUTM 2013 Annual Meeting Program, AUTM, 2013.

密度濃い情報交換の場の利用・技術移転情報の収集・意見交換  
AUTM 2013 Annual Meetingに参加して  
○大井文香（元 国立大学法人徳島大学）

## 1 AUTM2013 参加目的

Association of University Technology Managers (AUTM) <sup>[1]</sup>に、前任の機関国立大学法人徳島大学出願案件の技術移転を取り巻く状況に関する情報収集と研究機関技術開示と移転先を繋げる手法に着目してセッションやコースに参加することを主な目的としてAUTM 2013 Annual Meeting<sup>[2]</sup>に参加した。二つの目的は下記のとおりである。

・ **目的1**： 徳島大学出願案件である「レアメタルの選択的回収」の技術移転達成に向けて調査研究の機会を得た。この会場の参加者と意見交換を行い、技術移転に結び付けるための情報収集情報交換を行い各国の状況を取材する。

・ **目的2**： 研究機関技術開示と移転先を繋げる手法に着目してセッションやコース、レセプションに参加し、ネットワークを拡大する。

本報では以下、二つの目的に対して行った活動内容と効果について、報告・考察する。

## 2 AUTM 2013 Annual Meeting における活動内容

全般にわたって次のような活動を行った。

- ・ 技術内容の情報提供と見解等の情報収集
- ・ パートナリングシステム利用による面談
- ・ パートナリングシステムを用いずに行った個別ミーティング：多数
- ・ 展示ブース訪問における面談 10
- ・ 食事、レセプションを利用した意見交換
- ・ 会期中の意見交換：約 80 名（日本人約 40 名、海外約 40 名）
- ・ 会期後の意見交換継続：約 20 名
- ・ 収取資料：海外研究機関の先進的な技術移転の取り組みの紹介資料、コース配布資料
- ・ 講演者に対して行った質問の数：1 回（コースにて）
- ・ 参加した講演：（聴衆として参加）

A6 技術移転とバイドールに関して

B5 国際産学連携モデルについて

SIG4 国際産学連携セッション

D2 大学発特許の強化

E4 基礎研究科から臨床までの加速モデル

F5 Just Say No!

SIG10 NIH MTA システム

他全体セッション

ベンチャーフォーラム

AUTM Startup Business Development Course

AUTM Advanced Marketing Course

前述の二つの主な目的に特化して下記のような活動を行った。

・ **活動1**：「レアメタルの選択的回収」に対するインタビュー

・ パートナリングシステムを利用した面談

メールによる連絡、面談時間調整等を事前に行ったが面談時間が早朝となってしまったため、休憩時間、朝食の時間等を利用して情報交換を行った。

・ ブースを訪問しての技術移転に関する見解等の情報収集を行った。本案件の特徴を生かした情報開示の方法、情報の保護の方法など移転調査前段階の情報について意見交換を行った。

・ **活動2**：

・ 大学の研究成果の技術開示をより効果的に企業等多機関との共同研究や技術移転につなげるための活動をポイントに講演を聴いた。また、レセプション、食事、休み時間等に日常の業務における共同研究先の技術移転者と面談し、業務遂行のためのネットワークをさらに充実させることができた。日本からの参加者、日本国以外の参加者とも有益な意見交換を行うことができた。

## 3 AUTM 参加の効果

### 1\* 技術に関する情報収集

・ 米国を本拠地として世界中に技術移転をしている担当者から様々な情報を得ることができた。

地球資源としてのレアメタルのリサイクルの必要性、社会的な重要性と産業として利潤

を上げることのむずかしさ、各国での製品リサイクル体制構築の必要性等単なる技術移転を超えた様々な問題について意見交換を行うことができた。

また、国際的な技術紹介プラットフォームの利用、各国に応じた対応の進め方の必要性等様々な問題を比較検討するための問題点を明確にすることができた。

この情報をもとにさらに京都にて開催された AUTM ASIA<sup>[3]</sup>での活動に進展させることができたことも継続的参加の効果であると感じている。

## 2\* 国外、国内の大学技術移転者からの情報収集と意見交換

### 1) 参加者と意見交換

日本国外の参加者から、所属機関の技術案件に関して、興味や意見、技術開示の際の連絡方法などについて意見交換を行うことができた。

回を重ねて参加する毎に社会情勢の変化と技術移転者の取り組みの変化が対応して工夫も加えられていることが伺えた。変化に対応し改良すべきところと普遍的に継続すべきところがあることを感じた。

### 2) 実務者との情報交換

国際的共同研究の相手先機関の技術移転担当者と直接意見交換することによりメールや電話等では解決が難しい問題の解決の糸口をつかむことができた。

### 3) コース、セッションからの情報収集

このたびもそれぞれの講演から成功例、留意点、最新のMTAフォーマットの利用法等、多くの情報を得ることができた。幸い質問をする機会を頂けたので講演者のノウハウの一端を引き出すこともできた。

機関独自のシステムを学生さんとともに作成した例の情報提供を頂いた。日本も適用できるかどうかは今後の検討によるが興味深い活動であった。この他定期的な技術紹介イベントの開催などきめ細かな活動を継続的に行っていることがわかった。

面談の予約では、パートナリングシステムを利用して面談も行ったが、早朝の約束が多く、次回からはさらなる用意が必要であることを再認識できたことも効果の一つであると受け止めている。

## 4 今後の抱負

今回は、技術移転者としての研修と案件の情報収集という二つの目的で参加ができ、非常に多忙ではあったが充実した時間を過ごすことができた。今後も研究のほかの目的をもって参加できるように日常の業務に取り組みたい。

また、AUTM ホームページにはたくさんの情報が満載されているのでこれらについて勉強し、日常、ウェブサイトによる情報交換を行い、ミーティング時の生の意見交換に生かして参りたい。

日本の技術移転者と継続的な勉強会を続け日本からの AUTM 参加者の収集情報が集積されるようにしていきたい。

## 5 AUTM および日本の技術移転（産学連携/知財）実務者会議に求めるもの

AUTM に対しては、これまでのように国際的な参加者を変わず受け入れていただきたいと願っている。

いつか日本の特徴を生かしたセッションが開催できるように、技術を俯瞰する活動も必要であると感じている。テーマを提案させていただき、定期的に意見交換や勉強会に参加させていただきたいと願っている。

## 終わりに

振り返ると、技術移転者として日常の実務と研修の絶好の機会である AUTM Annual Meeting 開催の趣旨のとおりにご利用した過ぎなかったかも知れないし、まだまだ、到達できない情報が満載されていることがわかる。今後はホームページからの情報を活用していききた。しかし、私にとって実際に Annual Meeting に参加して生の声を聴くことができたことはとても貴重な機会であった。

## 謝辞

本年次総会の参加は平成 24 年度科学技術振興機構知財ハイウェイ研究のご支援により参加した。ここに、感謝申し上げます。

## 参考文献

- [1] <http://www.autm.net/Home.htm>
- [2] [https://www.autm.net/Meeting\\_Home2.htm](https://www.autm.net/Meeting_Home2.htm)
- [3] <http://www.autm-kyoto.jp/>



# 日本の技術移転実務者とAUTMとのWin-Winな関係構築に向けて ～AUTM 2013 Annual Meeting日本人参加者およびAUTM役員との意見交換～\*

○加藤 浩介 (大阪大学)

## 1 AUTM2013 参加目的

このたび、一般社団法人大学技術移転協議会<sup>[1]</sup> (University Technology Transfer Associations, Japan: 通称 UNITT)の国際交流委員、および Association of University Technology Managers (通称 AUTM)<sup>[2]</sup>の Assistant Vice President, Membership Development, Eastern Hemisphere, Japan を拝命し、主に以下の2つの目的で AUTM 2013 Annual Meeting<sup>[3]</sup>に参加する機会を得た。

・**目的 1** : AUTM 2013 Annual Meeting に参加した日本人から AUTM に対する感想・ニーズを聴取すると共に、聴取した感想・ニーズを AUTM 役員メンバー<sup>[4]</sup>に届け、日本の技術移転実務者と AUTM との WIN-WIN な関係構築を目指した意見交換を行う。

・**目的 2** : 技術移転組織の活動指標に関する国際ベンチマーキングを目的とする、AUTM 2013 Annual Meeting の国際セッションに、パネリスト (Speaker) として参加。同セッションの聴講者に対して有益な情報を提供すると共に、活発なパネルディスカッションに発展するような発言・議論を行う。

本報では以下、目的 1 に対して行った活動内容と効果について、報告・考察する。

なお、目的 2 に対して行った活動の成果は 2013 年 6 月頃に発刊予定の UNITTj 誌<sup>[5]</sup>において、報告する予定である。

## 2 AUTM 2013 Annual Meeting における活動内容

・参加した分科会の数 : 2 セッション (下記)

SIG4 (技術移転組織の活動指標に関する国際ベンチマーキング) パネリストとして参加

SIG11 (技術移転オフィスの経済効果測定に向けたデータ収集に関するセッション) 聴衆として参加

・パートナリングシステムを用いた会議 : 海

外の研究機関×2、ベンチャーキャピタル×1

・パートナリングシステムを用いずに行った個別ミーティング : 多数

・レセプション/食事 : ATTP Reception, President's Reception, Opening Reception, Director's Reception, Closing Reception, Breakfast 3 回, および Lunch 1 回

・会期中の意見交換 : 約 50 名 (日本人約 20 名、海外約 30 名)

・会期後の意見交換継続 : 約 25 名

・入手した資料 : 海外研究機関の先進的な技術移転の取り組みの紹介資料、科学技術商業化コースの関連資料等

・これまでに AUTM の専門人材育成コース等でお世話になった方々に対して手渡したプチギフト : 約 15 個 (西陣織風のコースター、浮世絵をプリントした眼鏡ふき等)

・講演者に対して行った質問の数 : 2 回 (基調講演および SIG11 セッションにて)

## 3 AUTM 参加の効果

上述の活動および AUTM Asia 2013 Kyoto<sup>[6]</sup>での活動等を通じて、2013 年 3 月 31 日までに、日本の技術移転実務者および AUTM 役員との協力のおかげで、以下の意見が寄せられた。これらは目的 1 に合致した有意義な成果であったと思われる。

### <AUTM に対する日本の技術移転実務者のニーズ>

・海外の大学からの技術導入に積極的な欧米の企業とそのコンタクトパーソンのリストを公開して欲しい。

・パネルディスカッションは、一般論が多く、具体的な事例に乏しかったので、もっと具体的な事例に基づく議論を展開してほしい。

・国際ベンチマーキングのセッションを設けてほしい。特に、産学連携オフィスの評価指標に関するセッションが必要。データ収集時

\* Toward establishment of a win-win relationship between Japanese technology transfer professionals and AUTM: Exchanging ideas with the Japanese participants to AUTM 2013 Annual Meeting and the AUTM board members. by KATO, Kosuke (Osaka University).

の、各指標の定義も明確にする必要がある。

- ・知財や輸出管理等、コンプライアンスに関するセッションを設けてほしい。なぜならば、私の仕事と非常に関係があるからである。

- ・欧米に習うために聴衆参加するだけでなく、日本の強みを発信するために、パネリストとして参加したい。

- ・AUTM Professional Development Session in Hamamatsu - 専門人材育成コース - <sup>[7]</sup>のような研修会を再び開催して欲しい。なぜならば、同時通訳付でAUTMの研修を受けることで、非常に理解が深まったからである。

- ・2013年8月18日(日)～8月31日(土)に開催されるG-TEC2013<sup>[8]</sup>にも参加したい。そこで、AUTM元会長から技術商業化・技術移転のエッセンスを教わりたい。

- ・欧米の技術移転オフィスに短期インターンする機会を、組織的に斡旋して欲しい。

- ・パートナーリング可能な、提携候補企業(ポテンシャル・ライセンサー)の数を増やしてほしい。

- ・日本を含む海外からの参加者のために、渡航助成制度(公募)を設立してほしい。

- ・AUTM Annual Meetingへの参加費を安くしてほしい。

- ・スライドありのセッションを増やしてほしい。なぜならば、英語力不足から、スライドなしのセッションは全く理解できなかったからである。

- ・AUTM Connect<sup>[9]</sup>(パートナーリングシステム)の使い方を教えてほしい。一度ログインしたが使い方がわからなかった。

- ・AUTM Global Technology Portal<sup>[10]</sup>の使い方を教えてほしい。

#### ＜日本の技術移転実務者に対するAUTMのニーズ＞

- ・日本の技術移転実務者が、AUTMに対してどのようなサービスを求めているのかを教えてください。

- ・AUTMとしては、同時通訳付のAUTM専門人材育成コース(いわゆる、「出前授業」)を、浜松<sup>[7]</sup>に続いて、日本で再び行いたい。

- ・AUTMとしては、AUTM専門人材育成コースを将来日本語で教えられるような、日本人講師を育成したい。

- ・日本もAlliance of Technology Transfer Professionals(通称:ATTP)<sup>[11]</sup>に加盟して欲

しい。

#### 4 今後の抱負

上記を踏まえ今後は、日本の技術移転実務者とAUTMとのWin-Winな関係構築に向けて、UNITT国際交流委員会およびAUTM Membership Development委員会において議論が深まるよう、適宜自らの役割を果たして参りたい。

#### 5 AUTM および日本の技術移転(産学連携/知財)実務者会議に求めるもの

上記の通り示された、日本の技術移転実務者およびAUTMのニーズに合った企画を実現するためには、日本の技術移転(産学連携/知財)実務者会議とAUTMとが協調して企画を具現化していくことが必要と思われる。

また、充実した提案につなげるために、引き続き、日本の技術移転・産学連携・知財実務者の方から、AUTMに対するニーズについて、幅広くご意見いただけると幸いである。

AUTMに対する意見の提供先:加藤 浩介

- ・Tel:06-6879-4206

- ・E-mail:kato@uic.osaka-u.ac.jp

#### 謝辞

UNITT国際交流委員各位、AUTM Board Members各位、AUTM 2013 Annual Meeting日本人参加者各位、また会期中に意見交換いただいた多くの方々に記して深謝申し上げます。

本出張は、文部科学省の自立化促進事業の補助を得て行った。

#### 参考文献

[1] <http://unitt.jp/>

[2] <http://www.autm.net/Home.htm>

[3] [https://www.autm.net/Meeting\\_Home2.htm](https://www.autm.net/Meeting_Home2.htm)

[4] <http://www.autm.net/AM/Template.cfm?Section=Board&Template=/CM/ContentDisplay.cfm&ContentID=10534>

[5] UNITTj 第8号, to be published in 2013.

[6] <http://www.autm-kyoto.jp/>

[7] [http://www.autm.net/AUTM\\_Professional\\_Development\\_in\\_Hamamatsu/9593.htm](http://www.autm.net/AUTM_Professional_Development_in_Hamamatsu/9593.htm)

[8] <http://www.uic.osaka-u.ac.jp/gtec/>

[9] [http://www.autm.net/Online\\_Partnering.htm](http://www.autm.net/Online_Partnering.htm)

[10] <http://gtp.autm.net/>

[11] <http://www.attp.info/>